

東京の教育

高大連携歴史教育研究会の企み

佐藤 健 二

その研究会の存在は、会員の空花正人氏から頂いたメールにより初めて知った。それによると関西産経新聞の「西論」といふコラムで、大阪正論室長の小島新一氏が当該研究会の活動に警鐘を鳴らしてゐるのである。この研究会は高校や大学の教員約四百人で作る民間団体で、会長は東大名誉教授の油井大三郎氏であるとのことだ。小島氏は油井氏のことを「歴史戦のイデオログ、あるいは司令塔の一人ではないかと以前から関心をもっていた」と言ふ。特に油井氏の『未完の占領改革—アメリカ知識人と捨てられた日本民主化構想』といふ著書を取り上げて、油井氏が（ハーパー）ノーマン史観、コミンテルン史観の持ち主ではないかと疑ふ。その油井氏が会長を務める研究会が「高校の歴史授業が用語説明に追われて生徒の歴史離れを招いており、暗記より思考力を育成すべきだとして、日本史と世界史の教科書用語を現行の半分以下の各千六百余語にしぼった『歴史用語精選案』」を昨年発表したといふのである。最終案は今年度内に発表するとのことであるが、その精選され削られた中に吉田松陰や高杉晋

復刊第八号

東京都教師会発行

(事務局) 横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三二〇

作といつた明治維新の立役者が含まれるといふ。

このメールを読んだ後すぐに、今度は全国版産経新聞の「明治一五〇年」といふ企画で吉田松陰が取り上げられていたので読んでみた。するとその記事の中にこの研究会のことがほぼ同じ内容で紹介されてゐたではないか。更に精選案に触れて次の様に書かれてゐた。「西郷隆盛や松陰門下の伊藤博文、木戸孝允らの名はあるが、『吉田松陰』の名はない」。

私は首を傾げた。その研究会の判断としては、幕末維新史を説明するときに、吉田松陰や高杉晋作を覚える必要はないと言ふことだが、この二人を外してはたして幕末維新史は正しく語れるのだろうか。そのことを検証するには多くの紙幅を要するであらうが、今はそのことが主題ではないので、私の乏しい知識を以てしても、それは不可能であると言つておく。

しかし問題の本質は、単に松陰一人の問題ではない。研究会は、知識と思考の問題に大きな間違ひを犯してゐるのである。当該研究会は、高校の歴史授業が用語説明に追はれて生徒の歴史離れを招いてゐると考へてゐる様だが、用語の説明に追はれるのは当たり前で、

何千年にも亘る世界史、日本史を通史として教へ、その用語を中心に試験が作られてゐる現状では、生徒はその用語を覚えることが勉強の中心となり、ゆつくり歴史について考へる余裕などない。これを改めるには大学入試も含めて作問方法を改めるしかないが今はこれには触れない。

歴史に限らず知識はみな暗記（記憶）に基づく。ただその暗記が意味もなく強制されれば苦痛を感じる。歴史嫌ひが増えるであらう。つまり歴史教育を暗記科目にしてゐるのは、実は教へる側の問題であるのだ。私の知つてゐるある有名な塾の講師は、数学も暗記だと明言した。それはどんな科目でも記憶を基にして脳に新しい回路を作り、思考を高めるからである。歴史だけが暗記物と批判されることが多いが、他の教科も、勉強といふものはまづ知識の記憶である。知識の増加、つまり言語の増加に伴ひ思考力も高まるのである。小学生より中学生が、中学生より高校生が思考力が高いとすれば、それは知識（言語）の量がベースにあるのであり、それ抜きにはあり得ない。「暗記より思考力」といふのは、俗論に過ぎない。

つまり私が言ひたいのは、当該研究会は歴史は暗記することが多いので歴史嫌ひが増えるといふ、暗記を強いる下手な授業をしてゐる教師側の俗論を利用し、思考力を高めるといふ美事で知識量の削減を試み、その削減の中に我が国の歴史上重要な事柄や人物を

潜ませ、継承されてきた国民の記憶の断絶を図るといふ「企み」を持つてゐるのではないかといふことである。それを小島氏は「新たな歴史戦」と見たのではないか。

我々は、今年当該研究会が発表するといふ最終精選案を注視する必要がある。

(会員)

一つの疑問から

藤井雅和

昭和三十年前後に発売され流行した歌謡曲に「南国土佐を後にして」がある。丘京子、鈴木三重子らが歌ひ、昨年物故したペギー葉山の音盤は二百万枚も売れたさうである。

ところで、実はこの歌を聴いたとき、違和感があつたのを思ひ出す。歌詞は今省略するが、二番にあたる歌詞に「月の浜辺で焚き火を囲み」、また、三番では「私も負けずに励んだ後で」の部分である。

都に來てゐるのになぜ浜辺が出てくるのか、回想の場面としても不自然である。父親と張り合ふのに「励んだ」といふのも唐突感が拭へない。鯨取りといふ壮大な快挙と、都に出てきた子供の日常の、あるいは当然の行爲である仕事や勉強といふものとは比べること自体に無理がある。

実はこの歌には元歌があることは音盤発売当時からあまり知られてゐない。これは帝国陸軍第四〇師団歩兵第二三六聯隊(高知市朝倉)は高知出身者が多かつたので通称「鯨部隊」と呼ばれてゐたが、その部隊で歌ひ継がれてきた兵隊歌だつたのである。

「南国土佐を後にして 中支に來てから幾歳ぞ 思ひ出します故郷の友が 首途に唄つたよさこい節を 月の露営で焚火を囲みしばし娛樂のひとつ時を 自分も自慢の声張りに上げて 唄ふよ土佐のよさこい節を 故国の親父は室戸の沖で 鯨釣つたといふ便り 自分も負けずに手柄を立てて 唄ふよ土佐のよさこい節を

そして各節の後によさこい節を、銘々がそれこそ自慢の喉を披露して歌つたものであつたと考へられる。勿論作詞者作曲者は不詳である。

歌詞中「中支に」が「戦地に」となつたり、「手柄を立てて」が「戦の後で」となるなど歌詞に少しづつ変化があるのも歌ひ継がれてきた故であらう。しかし、前線の兵士たちの生活がよく分かる名歌といへる。

この歌は復員者らによつて持ち帰られ、戦後「よさこいと兵隊」といふ題で元の歌詞がわづかに流布してゐたものと思はれるが、昭和二十八年開局のラヂオ高知(現高知放送)の番組で丘京子が「民謡 南国土佐を後にして」といふ題で作り変へられた歌詞を歌つたものとされる。後に昭和三十三年、日本放送協会高知放送局の開局記念番組に「南国土佐を後にして」と題してペギー葉山によつて歌はれたものが流行したのであつた。後に丘の音盤では「月のグラウンド」、また

鈴木盤では「月のキャンプで」となつてゐるのを知り、それなら判らぬでもないが違和感はないが、消えなかつた。ペギー葉山の歌つた歌詞は登場人物を男性から女性に換へてゐるやうにも取れるが、原因はそれだけではなささうである。

さうして、鯨部隊の元歌を聴いて、永年の疑問は見事に氷解した。戦後の流行歌は、歌詞を改悪されたものであつたのだ。兵隊たちが歌つた戦時歌謡を利用し改変して放送局が自局の宣伝に使用したといふわけである。戦後これを歌つた歌手たちの歌唱力はあつたのかも知れない。しかし鯨部隊の元兵士たちに、戦地ではこんな軟弱な歌ひ方はしなかつたと指摘されたといはれる。この歌詞では元歌を歌つた人たちの大陸における労苦は知ることができない。

このやうに戦後になつて改作(改悪)された歌詞は多い。例へば童謡「兵隊さんの汽車」である。「汽車汽車 ポツポツポツポウ シュツポ／＼シュツポツポウ 兵隊さんをのせて シュツポ／＼シュツポツポウ 僕等も手に手に 日の丸の 旗をふりふり 送りませう 萬歳 萬歳 萬歳 兵隊さん 兵隊さん 萬々歳」、以下三番まであり、曲は現行のものとはほぼ同じである。

この昭和十二年(一説に十四年)の歌詞は二十一年に作詞者により改作され、今の「汽車ぽっぽ」になつた。理由は連合国軍総司令部の横槍によるといふ説が一般である。この手

の話は枚挙に遑ない。

昭和十九年作詞の「お山の杉の子」は「大きくなつて国のため」が「皆のため」に、五番の「大きな杉は何になる 兵隊さんを運ぶ船 傷痕の勇士の 寝るお家」など以下の歌詞が大幅に書き変へられてゐる。

以前小学唱歌と呼ばれてゐた歌は戦後文部省唱歌になつたとき改竄が加へられた。「冬の夜」の二番は「圍爐裏のはたに繩なふ父は 過ぎしいくさの手柄を語る。居並ぶ子供はねむさ忘れて、耳を傾け、こぶしを握る」。しかしこれが「過ぎし昔の思い出語る」となつた。これでは子供がこぶしを握る理由が分からなくなつてゐる。

「村の鍛冶屋」の「あるじは名高きいつこく老爺」は「働きものよ」になつてゐる。語彙が貧しくなつてゆくことは明らかだ。

「我は海の子」も四番の「丈餘のろかい操りて」以下の歌詞が現在の教科書では省略されてゐる。これも連合国軍の介入といふ。

「螢の光」は学校教育では現在二番までしか歌はれないが、台湾では四番まで歌はれるさうである。日本では自ら世界を狭めてゐるのである。

他の文芸でそんなことがあるのだらうか。小説や随筆などでは字体や仮名遣ひが変へられることがあつても、それですら遺憾であるが、内容まで変へられることはない。時局柄伏せられたところでさへ復元されてゐる。まして短歌や俳句、また古典の世界などはこん

なことはあり得ない。なぜひとり唱歌などの歌詞のみがかういふ目に遭ふのか。縦書きを横に組むのでさへ著作物の同一性保持権の原則に抵触する疑ひがあるのに、中身まで変へてしまふのは全く理解し難い。

歌詞がまづいと言ふなら別の物を別の曲に乗せて歌へばよい。気に喰はない語句のみを変へてしまふといふ姑息なことをする理由は何なのか。それをすれば内容に矛盾が出てくるだけではなく、時代を読み解く資料的な価値までも損なはれてしまふ。

実はその他の我が国の文化伝統もさうして崩されてきたのではないか。歴史の一部分が抹殺され、作り変へられてはゐないか。戦後棄却された段階で万古不易のものをしつかり見定めた上であつたものかどうか、今のうちに精査しておかねばならないと考へるものである。

(会員)

戦前の中学国語の教科書を読む (三)

第三回

初まあり

斎藤 茂吉

明治二十九年に丁度僕が十五になつたので、父は湯殿山の初詣りに連れて行つた。その時父は四十五六であつたらうから、現在の僕くらゐの年であるが、もう腰が屈つてゐた。これは田畑に体を使つたためであつた。しかしそれまで幾度となく湯殿山に参詣し、

道中自慢であつた。

僕も父も、しばらくの間毎朝水を浴びて精進し、その間に喧嘩などを避け、魚介・虫類のやうなものでも殺さぬやうにし、多くの一厘銭を一つ／＼塩で磨いて賽銭に用意した。参詣というても、今時のやうに途中まで汽車で行くのではない。夜半にならぬ頃に立出し、夜の明けぬうち五六里は歩くのである。第一日は本道寺といふところに泊つた。そこまでは村から行程十四里である。第二日は、まだ暁にならぬうちに志津といふ村に着いて先達を頼んだ。それからの山道は、雪解けの水を渡るといふやうなところが度々あつた。まだ午前であつたが、湯殿山の谿合にかゝると風の工合があやしくなつて来て、とう／＼御山は荒れ出して来た。豪雨が全山を撫でて降つてくるので、笠は飛んでしまひ、蓆もちぎれさうである。大木の枝が目前でいくつも折れた。それでも先達はひるまずに、「六根清浄、御山は繁盛」と唱へて行つた。さうするうちに、渡るべき前方の谿は一めんの氷でうづめられて、それが雨で洗はれて滑々になつてゐる。下手の方は深い谷に続いて、ひどくあぶないところである。僕は恐る恐るその上を渡つて行つたが、そこへ猛風が何ともいへぬ音を立てて吹いて来た。僕は転倒しかけた。うしろから歩いて来た父は「茂吉匍へ。べたつと匍へ。」と鋭い声でさういつたから、僕は氷のうへに匍つた。やつこのことではがみついてゐたといふ方が好いかも知れない。

さういふことを僕はおぼえてゐる。

「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」といふ芭蕉の吟のあるその湯殿の山に僕は参拝して、初詣りの願を遂げた。鉄の鎖で辛うじて谿底の方へくだつて行つたことだの、それから谿間の巖から湯が威勢よく湧いてながれてゐるところだのを覚えてゐる。もどりに志津に泊して、びしよぬれの衣服をほした。この行程十六里と称へられてゐる。

第三日は、麗らかな天氣に帰路に就いた。七八里も来たころ、父は茶屋に寄つてぬた餅を注文した。ぬた餅といふのは枝豆を搗鉢で搗つて砂糖と塩で塩梅をつけて、餅にまぶしたものである。父は「茂吉なんぼでも食べろ」と云つた。それから、「道中をするには腹を拵へなければ駄目である。山を越す時などには、麓で腹を拵へ、頂上で腹を拵へて、少し物を持つて出懸けるとよい。」などといつてなか／＼上機嫌であつた。

もう山形の街も近くなつたころ、当時の中学校で歴史を担当してゐる教諭の著した日本歴史が欲しくなり、しきりにそれを父にせがんだ。その日本歴史は表の様に出来てゐて、工面のよい家の子弟は必ず持つてゐたし、小学校でも先生が教場に持つて来たりするので、僕は欲しくて欲しくてたまらなかつたものである。然るに、父はどうしてもそれを買つて呉れない。僕は山形の街に入つた。僕は幾度も頼むが父は承諾しない。そのうち、書物の発行書店のまへを通りすぎてしまつ

た。僕は、なぜ父はそんなに吝嗇だらうかなどと思ひながら、父の後ろを歩いたのであつた。(念珠集) (中学一年用)

【脚注】

齋藤茂吉 明治十五年、山形県に生る。東京帝国大学医科出身。医学博士。歌人。
湯殿山 山形県の西村山・東田川の二郡の郡境に聳ゆる月山火山の一雄峰。出羽三山の一。山中に国幣小社湯殿山神社鎮座。
本道寺 山形県西村山郡本道寺村。
志津村 山形県西村山郡志津村。
芭蕉 松尾氏。名は宗房。伊賀国(三重県)の人。俳人。元禄七年(二三五四)没、年五十一。

お知らせとお願い

○日本教師会第五十八回教育研究大会は下記の通り東京で開催されます。つきましては東京都教師会の皆様には多大のご協力を戴きたく、どうぞよろしく願ひします。
○本年は明治百五十年にあたります。そこで今年の教育研究大会の研究主題はこれを教育の面から取り上げます。この主題に沿つたご意見を会員の皆様より広く募ります。
○日本教師会の「日本の教育」(大会紀要)の原稿を募集することになります。この夏の研究大会に合はせて発行予定です。
一頁30字×46行で二頁(またはその倍数)。尚々切は六月末です。詳細が決定しましたら今後の紙面でお知らせします。

【日本教師会第五十八回教育研究大会】

日時
平成30年8月4日(土) 12:00~17:00
8月5日(日) 9:00~12:00
会場
「アルカディア市ヶ谷(私学会館)」
(〒102-0073
千代田区九段北四の二の二十五
03-3261-9921)

研究主題

「近代教育の再検討
—何を得て、何を失つたか—」

主管

東京都教師会

◎「東京の教育」への会員の皆様のご投稿をお待ちしています。
字数は三千字程度以内でお願いします。ただしこれより長いものは数次に分けて掲載することもできます。

仮名遣いは古典現代いづれかに統一して下さい。また、写真や図版はご相談ください。
送り先は題字下にあります。また、メールの送り先は次の通りです。

事務局アドレス(佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp